

「ラーニング・フォーラム 2003」の報告

成果を上げるための選手の育成方法

元サッカー全日本代表監督 加茂 周 氏

加茂 周氏 略歴

- 1939年 兵庫県生まれ
- 1967年 ヤンマーディーゼルサッカー部コーチ就任
- 1974年 日産自動車サッカー部(現横浜Fマリノスの前身)監督就任
- 1991年 全日空サッカークラブ(現横浜Fマリノスの前身)監督就任
- 1994年 サッカー日本代表監督就任(~1997年)
- 1999年 京都パープルサンガ監督就任
- 2001年 尚美学園サッカー部総監督就任
- 2003年 尚美学園サッカー部ゼネラルマネージャー

皆さんこんにちは、ご紹介頂きました加茂でございます。選手を相手に話をする時は非常に元気がいいのですけれど、こういう場で話をすると何かしら元気がなくなってしまって、話はあんまり上手ではないんですがしばらくお付き合いしたいと思います。

■ サッカーの監督とは？プロとしての厳しさ

私も長年現場の監督をやって参りました。コーチの時代を含めると30数年現場でやってきたのですが勝ち続けることは難しいです。サッカーの監督という仕事はアマチュアの時は非常に楽だった。成績が悪くて首になっても会社を首になる訳じゃないですから、会社に残ってがんばって仕事をやればそれなりに、年齢とともに収入も位も上がっていくということだったのですが、プロになったら違います。多分、世界中のあらゆる職業の中でサッカーの監督は一番首が飛ぶのが早いのではないかとくらい首が飛びます。Jリーグが始まりましてもう10年以上経っていますが毎年1/3の監督がシーズン中に首になります。1/3がシーズン終了と同時に首になります。1/3が翌年残って(監督を)やるのですけれどこんな仕事は一寸無いと思います。プロ野球との一番の違いはそこです。プロ野球の監督も今年2人首が飛びましたけれども、この10年位を考えるとそれほど沢山の人の首がシーズン中には飛んでいない。シーズン終了と同時に飛ぶ人は結構いるのですけれど、シーズン中には首が飛ばないのです。サッカーの場合には、サポーターがわいわい騒いで不満を述べたり、フロントが支えきれなくなって首が飛んでしまいます。そういう中で私も代表の監督をやっていって(シーズン)途中で首が飛びましたし、京都パープルサンガの監督をやっていて2年契約を結んでいたのですが、1年目のシーズンの途中で首が飛びました。こっちにも言い分はあるのですけれど、それを言ったってもう首が飛んでしまったら仕方がない。不満はあるけれどもチームを離れる。私もそういう貴重な経験を2回やったのですが、ホントに、首が飛ぶのが早い。だいたいサッカーは野球と違って指導法とかサッカーの理論とかゲームのやり方とか選手の取り扱い方など、変化のスピードが全て速い。野球の方は非常にゆっくり変化してゆくのですがサッカーは急激に変わっていきます。

今日本に沢山外人の監督が来ています、だいたい1年か2年の契約でやっているのですけれど、今年鹿島アントラーズのトニーニョ・セレーゾという監督が3年目に入りました。3年目をやるというのは日本では非常に珍しいです。外国の場合もそれも非常にサッカーの盛んなプロの人気チームの有るような国、例えばイタリアであるとかイングランドであるとかスペインであるとかそういう所で、5年以上1つのチームの監督を務める人というのはそう沢山はいません。だいたい1年か2年で代わっていく。2年以上続ける事ができる人は、それなりの実績を挙げているし、ファン／サポーターのバックアップもすごい。現場の選手だけじゃなく、フロントサイドやドクター、マッサージする人とかいろんな仕事をする人達がやっぱりこの監督はイイと言う評価を得て(監督を)続けられるのです。

■ 求められる監督自身の能力アップ

だいたい1つのチームを持って2年間で、監督としての全てのノウハウを出し尽くしてしまいます。3年目になってなお同じチームの監督をやっていける人というのは、勉強して、新しい理論を打ち出せる人です。そうしないと選手がついて行かない。監督は1人だけれど選手はだいたい25人から30人います、いつも1対25とか1対30で勝負するわけです。選手の中には頭のいいのも勉強家も結構います。「このおっさん、あんまり勉強してないで同じことばかり言ってんな」と感じると鋭い質問をってきます。するとウツとなって答えられない。その場でごまかしてしまう様な事が何度もあるといっぺんに選手の信頼が無くなります。

一応監督は現場に関してはオールマイティですからメンバーを決めたり、どういう戦術でこの試合を戦うとか、試合の途中で選手を交代させていくとか、全部監督の権限でやれるんです。一応選手はそれに従って試合をやります。プロですから自分の職場をかけてまで監督に逆らうような選手はいません。一応「はいはい」と言って聞くんですがそのはいはいが怖い。ホントに納得してはいはいと言ってるのか、まあしょうがないおっさん言わしとけと。

■ 監督の勝負はハーフタイム

試合中に監督が、コーチングボックスまで出て行って指示を出します。私なんか昔選手やってた時に、まあ我々がサッカーやってた時はお客さんなんか全然いないから監督がベンチからワーツとなんか言ったらもう一番向こうまで聞こえます。今はもう4万人5万人お客さん入ったらもう何にも聞こえない。で、そういう中で監督があそこへ出て行ってゲームのやり方を試合の途中で修正をしたいと思っても、試合の途中で戦術を変えたりシステムを変えたりする事はほぼ不可能です。ですから事前にミーティングという場でしっかり今日のゲームはこういうやり方でこうやってやるんだ、ということをつたき込んでおかないとなかなかうまくいかない。それと監督の勝負するのはハーフタイムです。ハーフタイムって言うのはピーツと笛が鳴って次ピーツと笛が鳴って試合が始まるまで15分です。

失敗する監督のパターンは、ハーフタイムで選手がロッカールームに戻ってきたとたんにはしゃべり始める。選手は疲れています。夏場の試合だったら早くこのシャツを脱いで汗を拭きたい、ストッキングも替えたいし下も全部履き替えたい。そんな時に、おまえ何やってんだワーツ！ といって監督がやり始める。間違った事を言ってる訳じゃない、正しい事を言ってるんだけど選手は聞く耳を持たない。そこで10分あまりしゃべり続けてそれじゃあ後半がんばっていけ、ハーツ！ て出て行ったけど選手は後半何やって良いか分からないまま、前半と同じような試合をやっちゃう。名監督と言われる人ほど自分のチームを前半と後半で変える事ができると言われています。ハーフタイムの間に、選手はフィールドからロッカールームに戻ってシャツを替え、飲み物を飲んでリフレッシュをします。普通はそこから監督の指示を聞いて後半出て行きます。しかし、監督も人の子ですから、前半だらしない試合になって、もう興奮状態になっている。今こんなことを言っても選手は聞く耳を持たないのにと分かっている、もう頭に来ちゃってカーツとなってしゃべり続けて

しまうというのが多いです。ハーフタイムって云うのは監督の勝負する時ですよ。しゃべる時間は2~3分しかないその間に、前半とは違う戦い方をさせなければいけない。それを全選手に納得させて後半に備えてモチベーションを高めて、いわゆる戦う気持ちにしてフィールドに出してやらないといけません。選手が頑張ることは当たり前です、お金がかかっているのですから。試合に出ていくら、勝っていくら、そういうギャラ貰ってプレーしているわけですから頑張るのは決まっているけれども11の選手の気持ちが1つにならないとチームとしての力が発揮できません。一人一人の頑張りを糸で結んでチームの成果を出すことが監督の仕事だと思うんです。それが出来ないとなかなかうまくいかない。

■ チームの勝利に必要な監督の右腕

チームの中に監督の右腕になる選手がいる。キャプテンでなくても良いです。ただゲームのリーダーとして全軍をリードしていける人間が要ります。そういうプレーヤーを持っていないとお客さんが喜ぶような良い試合をして、しかも良い結果を出していくというのは難しい。選手は90分間フルに戦って戻ってきます。結果が出せなかった試合でも、いや今日はみんな死にものぐるいでやったけれど相手の方が一枚上だった。次やる時はこことここを直して何とかして次は頑張ろうと云う気持ちで帰ってくるのと、1対0で押し切られて負けてしまった、あのおっさんの言うとおりにやったっていっこうにうまくいかな、今度は我々で勝手にやろうと思って帰ってくるのではずいぶん違います。

そこで、監督の右腕を育てることが監督のすごく大きな仕事になってきます。例えば私が日産を辞めた後フリーゲルズと云うチームの監督を何年間かやったんですが、そこに山口というキャプテンやらしてた選手がいます、足が遅い、亀だとかプレーキとみんなに言われる位足が遅い。代表チームでボランチという守備的な中盤の選手をやっていたんですが、代表チームに来る選手は結構みんな身体能力が高い連中の集まりですから、その中でスタートダッシュなんかやらずと、あれと、皆さんはご存じと思いますが名波という磐田にいる左利きのべらぼうにうまい選手なんですが、その二人が極端に遅い。20mのダッシュでピッと笛が鳴って体空けられてしまう、前の選手と体が空いてしまうんです。ということは50m、100m走ったらもうすごい差になってしまう。サッカーでは足が遅いからと言ってなんにも援助してくれるものはないですが、ただ賢い選手はある程度足の遅さはカバーできます。というのは、相手をこっちに走らせておいてプツと逆をついて走ったらスピード倍になるわけですから。足が遅くスピードがない選手が、長年第一線でやってそれなりの評価を受けている選手というのは絶対に賢い。普段の生活は馬鹿かもしれませぬよ、だけど、ことサッカーに関しては賢い。そういう選手じゃないと、いくらテクニックもボール扱いがべらぼうにうまくてもやっぱり役に立ちませぬ。

そういう山口という選手がフリーゲルズにいた。この選手が私の右腕になって苦しい試合を何とか乗り切って、相手の方が力が上であっても勝った試合ってたくさんあります。天皇杯の決勝で勝った時なんかは、ホントにもう私がユニフォーム着てやっているような感じで、いろんな指示を的確に出してやってくれたのですけれども、すごくそう云う事が大事です。今代表チームではそういう仕事をやっているのは中田です。年齢も今の代表では(ポジションが)前の方では上の方ですけれども、非常にクレバーだし意志も強いし、技術もある、運動量もある、みんなが一目置く選手でしかも頭が良くてリーダーシップが取れるという事で今の代表には絶対欠かせない人材です。小野とか中村俊介とか、うまい、すごい選手というのは今の日本のミッドフィールダーでは沢山いるのですけれども、その中で中田が一步抜けてやっているという状況を作っているのは彼自身の力だと思います。トルシエも彼とは一回バッティングしたんですけれども結局中田がいなくてだめだという事で、まあ、トルシエの方が折れて何回か話し合いをした末に、中田がチームのために死にものぐるいでやりますと言ってあのチームはうまくいったのです。ジーコも多分中田を頼りにしていると思います。

■ 日本のサッカー選手のレベル

話は一寸それますが今の日本チーム、中盤は技術とか戦術的な事に関してはどこの国と比べてもそれほど見劣りがしない位人材がそろってきています。ただ、肉体的な強さは違います、中田はイタリアの一流チームでポジションもって何年もやっているだけの事はあって、少々ぶつかられても倒れない。頭が良いからそれほど接触しなくて良いようにボールをコントロールしたり、相手がワーッと来た時に(ボールを)ぼんとたたいて走ったりという事が出来るんですけど、それは別にしても非常に強い。中村俊介との一番の違いはそこです。俊介はまだみ合いになったら転ぶ回数が多いし、同じ守っても中田と俊介を比べると守りの迫力が違う。しかし、その持っているアイデアとかテクニックの多彩さという点では多分俊介の方が上だと思います。だけどサッカーの選手としてクラブがお金を払ってそれじゃどっちの選手と契約がしたいかという話になったら中田の方が良い値段が付いて、良いクラブから声がかかるという事だと思います。

サッカーの選手をポジション的にいうとストライカーというポジション、これは非常に難しい。点を取らないと評価されない。例えば鈴木という代表選手がいて今ベルギーでやっていますが、彼なんかは守備の面ではホントに監督の頭が下がる位頑張ってくれます。しかしテクニックが無い、点を取るギャランティーを持っていない。柳沢もうまい。早いし巧いし賢い、味方のためにスペース作ったりするのは抜群に巧い、だけど点取れない。こないだの試合なんか死刑になってもおかしくないような失敗しよる(笑)。あの大事な場面1対0で負けていて、中田がもうふっと吹いたら入りそうなパスをくれたのによ入れない。まあ、ジーコなんか頭痛いと思いますよ、どうやったら点取ってくれるんやということなんですけれど。まあ、ストライカーというのはチームの中で1人ないし2人がストライカーのポジションにいるんですけど、これがいつも自分のゴールの方に向いてるんですよ。他の選手はだいたい向こうのゴール向いて試合やっているんですけど、ストライカーというのは自分のゴールを向いている時間が長いのです。というのは後ろから来るボールを受けなきゃいけません。センターバックというのは、だいたい体が丈夫ででっかくて化けもんみたいな連中がセンターバックやっています。人の足蹴るなんか屁とも思わない。痛い、(センターバックに)当たられたら、(ストライカーはセンターバックに)後ろからがーん！とやられる、そういうポジションにいて点を取るのが(ストライカーの)仕事なのです。今日本は残念ながら、世界に出してこいつだったら何とかしてくれそうだというストライカーが残念ながら一人もいない。

この間、高原が2点取った、今ドイツでちょこちょこ点取っている。高原高原とマスコミの人は騒ぐけれど、それじゃあここ1年間は何やったんやとなるわけです。コンスタントに点を取ってくれなければ困る。気が向いた時だけ取るような人は信用できない。だけど(他に)いないから監督は使うというのが今の日本のストライカーです。大久保という19歳の若い選手がセレッソ大阪にいますが、これがやたらと評価されている。もう新聞でもテレビでも大久保大久保と言ってるが、代表チームでは1点も点を取ってないのです。セレッソ大阪では取っているのですが、代表チームに来たら取らないというか取れないというか、素質は確かにあります。体はあんまり大きくないけれど足腰強いしスピードはあるし、シュートはロケットのような強いシュート打てるし、勇敢なんです。後ろから化けもん見たいのが当たってきても全然怖がらずにやれるのです、この選手なんか育って欲しいなと思うのです。

■ サッカー選手の成長を阻む壁

サッカーの選手というのは(ポジションが)前の選手ほど壁が来ます。だいたい18(歳)でデビューしたら2年目位19(歳)20歳位で1回目の壁が来ます。それはみんな割合抜けてくるのですが、2回目の壁というのが早くて22~23で来ます。そこで捕まってだめになっていった選手が山ほどいます。というのはプロになってから18~19では沢山ギャラ貰えません。しかし、18~19でポジション取ってストライカーで点を取るとウワーッと人気が上がります。クラブ側も良いギャラを払います。すると、あんまりもてないような小僧でも、もてると、女の子がいっぱい寄ってくる。

飲み屋に行けば〇〇ちゃん、〇〇ちゃんといって可愛がってくれる、楽しくてしょうがない。で、自分はもう一流だと思ってこのように(拳)2つ位合わせた位鼻高くなっています。何かの拍子に試合がうまくいかない、考えないやつは絶対うまくいかない。今はもうビデオがある時代ですから徹底的に分析されます。こいつが右足で持ってこの位置だったらどういうフェイントかけて来よるとか、こういう時にはこういう持ち方するとか、こういうときには横使って叩いたらこういうコースに走るとか、もう徹底的に分析されてしまう。そしたら例えば右利きの選手が右足でボールを持って、こういうフェイントが得意でそれで今までフィニッシュ出来たけど出来なくなってしまう、おかしいおかしいなと次の試合やったらまただめ、おかしいおかしいな、でだめなやつはそれでずーっとだめになっていく。賢い子はそれを、あ、俺のこの癖を見抜かれているなど、それじゃあ違う手を考えようと思って一生懸命練習します。

しかしもう若くしてちやほやされているからこう(天狗に)なっている上に、頭が悪いというのはまずだめになります。いっぱいいます、ここにサッカーに詳しい方もいらっしゃると思いますが、5~6年前に、ああそう言えばあんな選手いたなあとか、ああだれそれ云う選手は代表でやっていたなあとか、あると思います。だけど、同じようなパターンで皆だめになっています。そりゃね、若い選手が22くらいの選手が家で「寿司を食おう、みんな来いや」、で、女の子もおいでおいで、家に10人集めて、寿司屋の職人が3人も来て、魚持ってきて米持ってきて、みんなに寿司握ってくれてご馳走さん、で帰ったら気持ちいいですよ、やった方は。だけどおかしくなります。海外に行って、バンコックに行って、ホテルに泊まります、今日は昼からフリー、午前中練習で昼からは無し。そうしたらある選手が(あほなやつが)リムジンのハイヤー呼んできてふんぞり返って買い物に行くのです。帰ってきたらまあ高級品両手に持てない位で帰って来る。おまえサッカーしに来たんだろ。(笑い)。そんな子もいます。まずだめになっていきますね。

■ サッカー選手に求められる能力

サッカーというのは考える力がなくなったらだめです。私はいつも選手に言いますが、『巧い、速い、賢い』、これが揃ったら一流になれる。日本の国内だったら二つで大丈夫だと、巧くて速い、けれどそんなに賢くない、でもポジションによったら大丈夫だと。

巧くて賢い、だけどスピードがなく足が遅い、体があんまり強くない、大丈夫だと。ただもう一つ、『巧い、速い、賢い』プラス頑張るという要素がないとこれはプロでは成功しません。これはアマチュア止まりです。プロでやっぱり頭を出して自分でポジション取って生き残っていく選手というのは必ず頑張ります。素質が巧くて速くて賢い三つが揃って若くしてポジションとったけれど、ここというときに頑張れない。後半残り15分、もう心臓飛び出すくらいに疲れている、もう、足痙攣きそう、そういう状態でチームのために頑張れるかどうか、プロで通用するかどうかの境目です。さっきお話ししたように、バケモンみたいのが当たってくる、それ怖がったらサッカーはできない。それに勇敢に立ち向かっていく、そういう頑張りがあるかどうかというのがすごく大事なことです。だから、国内で優秀な選手といわれるには、さっき言ったように巧い速い賢いのうち2つあれば大丈夫、だけど、頑張るという要素がなかったらプロでは通用しない。ヨーロッパで一流になってポジション取ってそれなりの評価をされているような選手は、巧くて速くて賢いしかも頑張ることができる。だから、中田とか小野とかはその4つが揃っています。そういうことがサッカーをやる上ではすごく大事なことです。ですから、サッカーのボールを扱って戦術的に優れている選手は確かに、魅力があるのですけどしかし自分の(チームの)選手としてそういう何か欠けている選手、頑張るという要素のない選手はいくら華麗なテクニックを持っていても使いづらいと言えます。

■技術を身に付けるのは18歳まで

選手を育てるのは各クラブでやっていますが、テクニックが巧くなるのは早い遅いはありますが18歳です。18歳でもう技術的なことは卒業しないとプロで生きてゆくのは非常に難しいのです。だから、ある大学の監督さんが、「こいつはジャンプ力は抜群で足も速いし、背は1m85で非常に力もあるけれどもボール技術が問題だ。ボールがちゃんとコントロールできないのだから、この選手を加茂さんのところで預かって技術を伸ばしてくれたらいい選手になります、なる可能性があります」と言われるんですが、18歳ならまだしも22歳では難しいです。18歳前後に技術的なものは卒業してそこから戦術的な事をいろいろ覚えていく、そして体を鍛えてより強くより速くなっていくのです。

また、いくら技術があってもバーンと相手に体寄せられてきて足でも押さえられたら出来ないというのでは、技術が無いのと一緒です。それだったらどこの曲芸団ってお客さんに見せたいので、サッカーの試合でお客さんの前でやろうと思ったら少々ぶつかられても疲れていてもやれないと良い選手にはなれないわけで、こういうことがすごく大事です。18歳の選手が手元に来たボールが止まらない、一寸スピードが上がったらボールのコントロールが出来ない、10m向こうから強いボールが足下に来たらそのボールをワンタッチでこっちに向けられない、3回・4回さわらないとこっちに向けられない、そんなレベルではダメです。その間に敵はすぐ来ますから。今のサッカーは昔と違ってボールがちょんちょんと動いたらあつという間に周りは敵だらけになります。そういう中で速く正確にプレーしていかないとすぐ敵のボールになってしまいます。

これからこいつにボールを取る訓練をしていかないかん、というのではプロの監督は相手にしません。特に一軍の監督やっている外国人の監督だったらそんなの知らんとなります。おまえBチーム行ってやっつけ、絶対監督の目に1年間止まらないです。だからスカウトやる人達もよく考えないといけません。一寸名前があるからと言って、高等学校で全国大会で3点取った・4点取ったと騒がれた選手を取ってきて、その選手がボールコントロールに問題があるようでしたら、まず、物になりません。絶対成らないとはいえませんが非常に確率が低い。

■サッカー選手のスカウト方法と選手の待遇

プロ野球でコーチをやっている人達と時々話をします。100打席で30本ヒットが打てたら3割打者なのですが29本だったら3割打者じゃないのです。2割9分です。毎年3割を打つやつはやっぱりすごいお金取れる。だけど、毎年3割近くは打つけど3割は打てないのはそんなに金取れない。そういうので金取るやつはホームラン王になるとか打点王になるとかベラボウに守備がうまいとか、何かプラスアルファ持ってないといい金稼げない。サッカーも同じです。お金稼げる選手はやっぱり何かが要ります。ボールを扱えてボール扱いが巧いは当たり前ですから、それが飛び抜けて巧くても大してお金は稼げません。それプラス相手を抜く力があるとかゴールに叩き込む力があるとか人よりも守りが強いとか、人の倍位走れてチームのためになるとか、プラスアルファを持っていないとなかなか良いお金は稼げないと思います。ですからスカウトの目というのは非常に大事です。サッカーは野球のように沢山スカウトはいません、というのはサッカーは各県単位で年齢別に、中学の2年生から(かな)10数名位選手を選んでチームを編成していろいろやってまいす、練習会をやって中央に出て行って試合をやる。それが例えば東北地方だったら東北で各県の年齢別に例えば高校1年生の優秀な人を集めてそれを今度は東北全体でみてその中からまた1チーム編成してそれを中央に送ってくる。日本のいくつかに分かれた地域からそういうチームが集まってくるからまず見落としが無いのです。昔は掘り出し物がありましたよ、私が日産やってる頃はそういう組織はなかったですから。各チームもまだアマチュアでしたからね。いろいろその地方の監督さんとかいろんな人から情報もらって見に行くと、『あ、こいつは物になりそうだな』とか『楽しみだな』と、でそれが全国大会に出てくる、あやっぱりやりよる、で、これ取ろう、となるわけです。しかし今はもう殆ど見落としがない位サッカーの日本協会の組織はしっかりしています。ですから、スカウトはそんなに沢山要りません。一人こまめに動き回れる人がいて、いざ大物取る時にそれの上が出て行った

らしいわけです。或るチームの、この人はすごい大物の監督やった人なんです、それがこの選手を取るのに一肌脱いでくださいとチーム側から頼まれて、『よっしゃ、俺に任しとけ』とそしてその選手のすぐ横にマンション借りて1年間居たってそれであれこれ世話を焼いてちゃんと連れてきます。

日本のサッカーは、今世界のランクで20何位かです。27か28位です。しかし、本当の実力はまあ50か60番位の所だと思えます。ヨーロッパや南米、あるいはアフリカのきちんとした監督コーチが付いてかつ財政的にもある程度しっかりしているチームには、いざとなったらまだまだ日本は勝てません。日本のサッカーがワールドチャンピオンになるような時代を作るといふことになると、やっぱり選手のサイズを上げていかなければいけません。また、サイズを上げていって運動能力の高い子供達が「俺はサッカーのプロの選手になって国際舞台で頑張るんだ」といふふうになってもらうには、やっぱり財布がもっと大きくなるとなかなか難しいと思えます。

日本は島国で離れていますので、国際試合をやると云っても大変です。日本に国際試合で外国からチームが来てくれる、しかもシーズン中に来てくれる場合は、彼らはだいたい土曜日に試合をやって日曜日に飛行機に乗って日本に来ます。月曜日の夜とか火曜日について水曜日に試合をして帰るわけです。良いコンディションであるはずがない、だから私の時もそうでしたしトルシエもそうですが、日本に来た相手とは滅多に負けません。よっぽど実力差があったら別です。ブラジルのようにツアーで回ってきて時差も関係ない日本で2日3日準備をして試合というのでは、もう勝負にならない位やられたんです。けれどもそれ以外だといきたい勝負になります。ユーゴに勝った時など、ユーゴはすごいメンバーで世界選抜みたいなメンバーだったのですけれど日本で試合をした。しかも6月で何とか湿度が高いめっちゃめっちゃ暑い日になってくれないかなと思っていたら、なったんです(笑)。彼らは湿度と暑さに弱い、もう後半全然走れない。走っているのはストイコビッチという日本で名古屋でやっていたやつだけなんです。あれは慣れていますから、後はもう全然だめ。それで1点取って押し切って勝つたのですが、涼しいところでやっていたら5~6点入れられています。まあそんな事がありましたけれども、選手を育てていくという事に関しては、運動能力の問題と後は環境、特にプロの選手になってくると財布の大きさというものが大事になってきます。

■アマチュア選手の育て方への要望

プロにあがっていくまでもう一寸丁寧に育てて欲しいなと思えます。日本は子供の段階＝だいぶ変わってきましたけれども例えば高校まではほとんどがトーナメントなんです、例えば全国大会の何々県予選と言ったら全部トーナメントで負けたら終わりということです。ですから監督さんは勝ちたい。ですから、技術的な事をしっかり18までにトレーニングで卒業して於いて欲しいのですけれども、強さとか速さがあればそのくらいの年齢までは役に立つのでどうしても監督さんは勝ちたいためにそういうやり方をします。それを我々が、「あんたそんな育て方しちゃだめだ、選手がかわいそうだ」とはいえないのです。それをやらなかったら今度はその監督さんの首が飛ぶわけですから。特にその地域の有名高校の監督になった人はやっぱりその地域とか県とかの期待を一身に受けていますから、全国大会連れて行ってしかも優勝を狙えるようなチームを作りたいというのは当たり前の事なんです。ですから国見高校であるとか帝京であるとか静岡学園とか有名な高等学校からプロに入ってきた子で、アタッカーで大成した選手はほとんど居ないんです。高校の時にすごかったのは、いっぱい居ます。帝京の磯貝であるとか桐蔭からマリノスに入った阿部とか、今大久保が活躍していますけれども。今までの例からすると22~3の壁をぬけてその後超一流であってほしいのですが、成れない可能性も半分以上有ります。まず、技術的に自分の得意なやつを押さえられた時に、それを切り抜けるだけの工夫と努力をする事ができるかということ。それと、人気とかそういう事に負けないだけの強さを持っているかどうか、さらに、サッカーというのは周りとか巧くやれないとなかなか生き残っていきません。19歳や20歳位までは傍若無人であろうが何しようが点さえ取ればいい、点さえ取れば誰も文句言わない。しかし、22や23歳になると下も出てきます。上との関係も大事になってくる年齢で、いつまでも俺一人良かったらいいというよう

な事だとはじきにされてしまいます。すると仲間がチームの中になくなる、勢い外に飲み友達を作ったりガールフレンド作ったり、運が良ければいいんですが運が悪いとんでもない友達が出来てしまう。えー、ほっぺたにペケが付いたような人とか女性でもとんでもないのが付く。それでだめになっていったやつもいっぱい居ます。

■ 運も実力の内

そう言う事を切り抜けていく力とやはり選手の持っている運というのがすごく大事です。実力プラス運と言うんですけども、例えば陸上とか相撲とか、まあ、相撲は戦いですからフロックみたいなものもあるんですけど、陸上競技で100m10秒フラットで走れる人が9秒5では走れない。10秒フラットの選手が11秒で走るの簡単なんです。だけど9秒5で走るの大変です。まず不可能だと言われています。自分と同じ世代に自分よりもコンマ2~3秒速く走れるやつが10人いたら絶対10番以内入れない競技なんですね。だけどサッカーは違う、さっきも言ったように足が遅くても賢ければ何とかなる。勿論技術はいりますけど賢ければ何とかなる。そういう競技ですから大丈夫なんですけれど、やっぱり運の強い人というのが必要です。私が監督やっていたアマチュア時代ですけど自分でスカウトに動きます。で、「僕は小学校の6年生の時に県の大会で優勝した時に試合に出ていました、とか高等学校の全国大会で(正月の大会で)優勝しました、大学の3年生の時に大学選手権で優勝しました」など優勝したチームのやつ大好きです。そういう試合で自分が1点取って1-0で優勝しましたというやつはもっと好きです。そういう運持っている選手です。運の無いやつって居ます。それが選手でいろんなチームから勧誘される。ここが一番良い条件出してくれたし、スカウトの人も何か良さそうだし、まあこの人について行ったら間違いないだろうと思ってAというチームを選ぶ。せっかく誘ってくれたBとかCとかDのチームは丁寧に断ってAのチームに行く。行ったら同じポジションにすごいのが居る。そのスカウトの人は「いや、おまえが来たら、1年であまえがもっと力を付けたら絶対この選手を外に出すから、売ってしまうから、そしたら1年たてばおまえは絶対にポジション取れる」、「ありがとうございます、それじゃあ参ります」と言って行ったら、そのスカウトやっていた人が半年でチームを辞めてどこかへ行ってしまった。それでフロントの人に話し、現場のコーチに話したら、いや俺はそんな事聞いてないよ、知らんよといわれた。そしたら自分と同じポジションの大物の選手はずっと居るみたいやと結局試合に出られない。たまたまよそのチームから声がかかったけれど、そのチームと優勝を争うようなチームにはチームとしてクラブとして出したがらない。まあ、2部リーグとまでは行かないけれども「おまえどこ

■ サッカーの試合数が選手の成長に影響を与える

プロになると試合が定期的にあります。Jリーグは外国に比べると一寸試合数が少ない、30試合ですから一寸少ない。30プラスカップ戦、ナビスコというカップ戦やっているんですがそれが予選のリーグが3試合有ってそれを切り抜けて決勝まで行くと後3試合やれる。準々決勝・準決勝・決勝の6試合です。それプラス天皇杯、これトーナメントです。これJリーグの1部は5試合で優勝です、32の所からJリーグは出て行くんですが何干というチームが3月頃から各地方で試合を積み上げて行きます。予選をやって、トーナメントをやって、全部トーナメントです。で、勝ち上がってきたチームが最後元旦に決勝をするというのが天皇杯です。それもJリーグの1部ですと5試合、優勝戦までやって5試合、すると、30+6+5、41試合、プラス親善試合、有料の親善試合ですね。例えば外国のチームが来てやるとか国内でやるのが2~3試合、まあ、5試合はなかなか出来ないと思うんです。有料試合ですと4試合くらいだと思いますね。たくさんやるチームで。すると45試合位が今日本で沢山試合をするチームだと思います。それプラス代表選手というのは当然自分のクラブで怪我さえなければ試合に出ますから、その45プラス代表の試合が年間で多い年で7~8試合、まあ、54~55試合位になると思います。ところがブラジルなんか行きますと、例えば16(歳)で有名なクラブのトップにあがってきた、例えばコリンチャンスというブラジルの有名なクラブに16歳の若手の選手があがっ

てきた、よっしゃおまえ試合で使うぞとなると年間およそ80試合位やります。ブラジルってオフがないんですよ。ブラジルという国は1年中サッカーやっています。だからこの国は少々政治が悪くても暴動が起こったりしないんだと言うんですね。あのカーニバルとサッカーのおかげで暴動がないんだと向こうの国の人が言うんですから。トニーニョ・セレゾって今鹿島の監督やっている人は、ナショナルチームで3回位ワールドカップ出ている超有名なミッドフィールダーだったんですけど、彼が10代の頃は80試合どころかもっとやったと言ってますから凄い数をやっています。で、だんだん年齢が上がってきます。例えば、30の選手で超有名な選手になると1週間に1回しか試合をしないという契約になってしまって、年間で40から50試合位しか試合をしない。だけど若いのはもうこき使われますから1年中試合。

■ 試合終了のホイッスルが鳴った瞬間に次の試合の準備が始まる

監督というのは例えば今から試合やるとしたとき、有る程度経験をもって実績のある監督だと有りとあらゆる状況を準備しています。試合が始まる、1分で大怪我をして試合を続けられない選手が出ると云うような事はあるわけです。最初に接触した時にばーん！と足振ったら相手も振ってきて足が折れてしまい、試合やるのは不可能となる。交代要員を11人用意するわけにはいかない。とくにJリーグですと交代は5人の中から選ばなければいけない。だから有りとあらゆる状況を考えて、ベンチに座らせる5人を考えておかなければ失敗する。リスクをかけてこの選手でいってみようと起用しても、全然ダメでミスばかりしていて役に立たない。それじゃあそれ換えないかと、誰使うかと、で、ベンチでうーんと考えているうちにポンと点取られて試合が不利になってしまうと云うような事もあります。だから、有りとあらゆる準備をする必要があります。私がサッカーのコーチとして鍛えられたデッドマル・クラマーさんというドイツ人のコーチが未だに忘れられない言葉を幾つか言ってるんですけども、そのひとつが、試合終了のホイッスルが鳴った瞬間に次の試合の準備がスタートするんだと。おー試合終わった終わった今日は何処で飲もうかとか、誰と飲もうかなんてそれは大事な事なんですけれどもしかし少なくとも監督の頭の中は、次の試合の準備がその瞬間にスタートしていないとダメだと言われました。なかなか難しい事なんですけれど、例えば代表チームの監督ですと年にまあ、多くても10試合位です。ぽこっと試合して次の試合は3ヶ月後、だけど終わった瞬間にもう3ヶ月後の試合の準備がスタートしてないとどうしてもやっつけ仕事になってしまう。その結果は、良い結果が出るかもしれませんが、しかし長期的に見た場合には失敗に繋がる可能性が強い。そう言う事を叩き込まれました。私もそれを忠実に守ろうとしました。守ったかどうかは別にして、守ろうとしてそれでもあー良い事習ったなど今でもそう思っています。そう云う事で長年現場で監督をやってきました。今はもうただのオジサンをやっているんですけど、まだ元気ですから、もしどっかから声がかかっておまえ監督やってくれと言われたら、ひよっとしたらもう一回現場に立つかも判りません。

やってやろうという気もあります。私と同年で世界の中では監督やっている人いっぱい居るのでそんなに老け込んだらいけないと思っています、もし、そんな話をどこかでお聞きになったら、おう、加茂やる言うとなつたでと是非お伝え下さい。(笑い)。どうも皆さんありがとうございました。